

# 経験される時間の形而上学的射程

## 1900年代のベルクソン著述から

永野拓也

### はじめに

ベルクソンにとって「経験される時間 (*temps vécu*)」は、科学が経験の世界に着地するために必要な因子である。他方、経験される時間についてのベルクソンの考え方によっては、例えば相対性理論における双子の問題のように、一様ではない仕方で運動する二つの系の時間のずれを説明することはできない。本稿のねらいは経験される時間についてのベルクソンの考え方の形而上学的な位置づけを確認することである。上に述べた特殊相対性理論における時間のずれの問題に、経験される時間についてのベルクソンの考え方が適用できない理由を、この確認によって示すことができる。本稿の末尾では、この限界を踏まえた上で、加速系の時間のずれの問題に対応できるようにするには、経験される時間についてのベルクソンの考え方をどのように拡張することが有望かを示唆しておきたい。

経験される時間についての考え方は『持続と同時性』におけるベルクソンの特殊相対性理論との対決を牽引するのだが、この考え方は『持続と同時性』において突然持ち出されたわけではなく、最初の著作において空間や数の概念との対比で抽出された時間的な事象の継起、つまり「持続 (*durée*)」の概念にその基礎がある。ただ、経験される時間についての考え方は持続の概念そのものであるわけでもなく、とくに『創造的進化』に先立つ 1900 年代初頭の数年の間に練り上げられたと考えられる。本稿ではそこで、『創造的進化』第4章の数節を含むこの時期のベルクソンの著述のうちに、経験される時間についての考え方の特徴と、ベルクソンの形而上学におけるその役割を検討することにした。形而上学的実体と、経験される時間との間でベルクソンが行う対比を考察するにあたり、Peter Simons の全体と部分の間の依存関係をめぐる考察が示唆的である。以下で必要な場合は Simons のこの考察を参照する。

## 1. 経験される時間と依存される実体

ベルクソンは経験される時間の意義を、形而上学的な実体、つまりそれ自体が根拠であり、何ものにも依存せず、逆に全てのものがそれに依存するところのものとの関係において考察する。この態度は1902年から1903年にかけての、コレージュ・ド・フランスにおける時間観念の歴史に関する講義、1903年の「形而上学序説」、また1907年の『創造的進化』において明らかである。ただ、これらの著述の間で、経験される時間の扱いは多少異なる。ベルクソンの確定した態度は刊行された著作のうちに示されていると思われるが、講義のいくつかの箇所は参照に値する。経験される時間と伝統的形而上学の実体との関係についてのこの講義における叙述は、著作における叙述と方向においては変わらず、場合によっては経験される時間の置かれる文脈を講義の叙述の方がよりはっきり示すこともあるからだ。講義については著作との異動を示しつつ参照することにする。

『創造的進化』を中心として、経験される時間は、待機の持続の経験として繰り返し特徴づけられている。

もし私がコップ一杯の水を用意しようとするれば、私にはどうすることもできず、私は砂糖が溶けるのを待つほかない。このささやかな事実は甚だ示唆的である。というのは私の待つ時間は、かりに物質世界の歴史全体が一挙に空間のうちに展開する場合、この歴史全体にわたって適用される数学的時間ではないからだ。私の待つ時間は私の忍耐と、つまり私の持続のひとかけらと一致する。このひとかけらを意のままに伸ばしたり縮めたりすることはできない。これは考えられるものではなく、経験される〔生きられる (vécu) : 引用者補足〕ものだからである。これは何らかの関係ではなく、ひとつの絶対だからである<sup>1</sup>。

経験される時間がひとつの絶対であり、数学的に取り扱える「関係」と対比されることを確認しておく。この意味で、経験される時間は一定の幅をもった頑なな持続であり、勝手な変形には抵抗する。この対比を基礎としたうえで、経験される時間は数学的な時間と対比されている。数学的な時間は経験される時間とは反対に、関係に存し、自在に変形される。

物理学において実在の時間に対応するとみなされるのは数学的時間である。

物理学的な諸科学において問われるのは待機の頑なな時間ではなく、その間隔が計上されず間隔の末端だけが重要となる時間である。

物理学者にとって重要なのは、過程が占める持続の単位の数である。つまり、物理学者は単位そのものには頓着しない。だから世界の継起する状態が一挙に空間のうちで展開しても物理学者にとっての科学は何の変化も被らないし、物理学者が時間を語るのをやめることもない。だが私たち、つまり意識ある存在にとって、重要なのは単位である。というのも私たちは間隔の末端を数えるのではなく、間隔を自ら感じ、生きるからである。ところで私たちはこの間隔について、一定の間隔として意識する<sup>2</sup>。

待機の変更しがたい間隔が、ベルクソンにとっては経験される時間として重要である。なぜなら物理学的諸科学は逆に、点としての瞬間つまり間隔の末端に注目し、間隔そのものは好きに操作しうるものとして扱うからだ。この近代の物理学的諸科学の態度は、データから予測を導く必要にもとづく。これらの科学の起源には天文学がある。

だがベルクソンによると近代諸科学は、計測された数値から蓋然性の高い結果を計算するための、数学的な足場や骨組みに還元されることはない。諸科学は、流れの運動という動的な現実についての、経験される時間を前提とする。

ベルクソンは近代諸科学と、古代の学知の基礎となった古代哲学との対比のもとで、近代諸科学にとっての経験される時間の不可欠性を指摘する。古代の哲学にとって、時間は存在の欠如の印でしかない。ベルクソンはアリストテレスを参照しながら、時間を余分なものとする古代哲学の構図を説明する。

古代哲学の観点からすると、空間と時間とは、不完全というよりはそれ自体から逸脱した実在性が現れ、自らを求めて動きまわる領域でしかない<sup>3</sup>。

感覚的な形相は私たちの前にあって、その理念性を取り戻す用意は常にできているが、これらの形相がうちに抱える質料、これらの形相の内なる空虚、これらの形相が、それ自体の現にある姿とあるべき姿の間に生じさせる間隔のせいで、絶えず邪魔されている<sup>4</sup>。

あなたは同時に時間と空間を、つまり追求され続けるが決して到達されない安

定した平衡の周りで更新され続ける無際限な振幅を消去する。事物のあるものは別のものへと立ち戻る。空間のうちに弛緩していたものは純粋な形式へと張り直される。過去、現在、未来は永遠という単一の瞬間に縮小する。／つまり自然学とは劣化した論理学だということだ<sup>5</sup>。

本当の関係は、二つの要素を相等とみなすことだ。第一の要素は単一な項であり、第二の要素は無際限な項の総和である。いわばこれは金塊と硬貨の関係である。ただし金塊が提示されるや、硬貨は自ずと供給されるのである<sup>6</sup>。

古代人にとっては、時間は理論的に無視できた。というのは、事物の持続は事物の本質の墮落しか表明していないからだ。学知が関わるのはこの不動の本質である。変化は形相がそれ自体の実現を目指す努力でしかない。この実現こそ私たちにとって知ることが重要な全てである<sup>7</sup>。

ここでは理想的形式（形相）、すなわち唯一の真なる存在と、純然たる虚無としての質料との間の隔たりが、時間的・空間的な現象の出現を説明するための基本的な枠組みを与えている。

この基本的な枠組みとの対比のもとで、ベルクソンは近代諸科学にとっての、経験される時間の不可欠性を提示する。

だが全ての瞬間を同列に置き、本質的な瞬間や頂点や絶頂を認めない科学にとって、変化はもはや本質の減少ではないし、持続は永遠の引き伸ばしではない。時間の流れは実在そのものになる。研究されるのは流れ去る事物である<sup>8</sup>。

時間はしかしこれらの科学に、正面から持ち込まれるのではない。近代諸科学は確かに、時間の規則的経過とともに空間内で位置を変える点によって走査されるものとして、幾何学的図形を捉えることに成功している。ベルクソンはこのような、各点での流れの変化・細分を、近代科学の基礎と考えている。コレージュ・ド・フランスの講義においてベルクソンは、持続の観点に立つなら、複数の方向の共存として把握された「内部」を運動に見出せると指摘する。「内部」というのは、点が曲線上を動くにつれてこの点を接点として現れる接線の動的なイメージである。

だが持続のうちに身を置くなれば、運動の内部を考えるならば、二つないしは複数の異なる方向、二つの異なる意図を得ることができる<sup>9</sup>。

ベルクソンはこれによって、ニュートンの微分計算すら、経験される時間としての流れにもとづく指摘している。

数学的な時間そのものは流れによって生み出された。従って何か数学的時間よりも深いものがあり、それが流れである。これを私は持続と呼んだ<sup>10</sup>。

このような「内部」の理解は「形而上学序説」ではより簡潔に図式化される。

近代数学はまさしく、出来合いのものをできつつあるもので置き換えることにより、量の発生をたどり、運動を外から、その展開の結果においてではなく、内から、変化する傾向において把握し、事物の描線の運動的連続を取り入れる努力である<sup>11</sup>。

物理的・数学的諸科学はしかし、運動について端緒にあったこのような内的かつ質的な展望を見失う。それはベルクソンによれば、この展望を記号的かつ量的な仕方で表現することにより、「目覚ましい応用」<sup>12</sup>への道を開くことが諸科学には必要だからである。形而上学だけが、実用の下心なしに、運動の内的かつ質的な展望を、あるがままの経験される時間として把握する。形而上学はこの意味で、「量とは常に生まれかけの質である」<sup>13</sup>ことを忘れない。

この論調は『創造的進化』でも同様である。ベルクソンは、運動の数学的モデル化からすり抜ける「流れ」の把握を形而上学に委ねる。

確かに流れ去る実在については、瞬間的なものだけがとどめられる。だがまさにそれゆえに、科学的認識は別の何か、科学的認識を補完するものと呼び出さねばならなかった<sup>14</sup>。

私たちがとる仮説において、科学と形而上学は、補完しあうが対立する二つの認識の仕方である。科学は瞬間しかとどめず、持続しない。形而上学は持続そのものを射程とする<sup>15</sup>。

この意味での形而上学は、スピノザとライプニッツ（ベルクソンは文脈に則して著しく図式化して二人の哲学者を扱う）に代表される近代形而上学と距離を取らねばならない。これら二つの近代形而上学に共通の特徴は、普遍的な関係を古代哲学の概念的な形相の位置に置くことである。

宇宙は各瞬間に先立つ瞬間との関係で厳密にその位置が決定され、どの瞬間についても理論的に計算可能な諸点の形づくるシステムとなる。ひとことでは、行き着く先は普遍的機械論である<sup>16</sup>。

機械論の主張は本質的には、宇宙のあらゆる点相互の、宇宙のあらゆる瞬間相互の数学的な連帯の主張であるから、機械論の論拠は、空間のうちで並列される全て、時間のうちで継起する全てがそのうちで収縮する、ひとつの原理の同一性のうちになければならない<sup>17</sup>。

空間のうちでの並列の見かけの相互の決定は、真なる存在の不可分性に由来する。時間のうちで継起する現象の厳密な決定はただ、存在の全体が永遠のうちに与えられていることを表現する<sup>18</sup>。

しかし普遍的なシステムを経験される現実に応用するにあたり、現実はこのシステムに抗う側面を示す。近代形而上学は現実の御し難い側面を、システムの複数の「表現」ないし「翻訳」として処理する。

実際、新しい科学の最初の結果は、実在を質と量とに二分することであり、その一方は物体〔身体〕の、他方は靈魂の持分に記帳された<sup>19</sup>。

二つの項の間の繋ぎを全部断ち切った上で、哲学者たちはこれらの項の間に厳密な平行関係を打ち立てるに至る。こういうことは古代の人々の夢想だにできなかったことである。さらに哲学者たちはこれらの項が互いの、逆転ではなく翻訳であると考えに至る。ついに哲学者たちは、二つの項の二元性の基体（substrat）として、ある根源的な同一性を与える。目標であった総合により、こうして全てが包括されるに至る<sup>20</sup>。

結局、多様な表現を内に含む普遍的なシステムが、ある根源的な関係を中心とし

て構築される。スピノザにおいて、質と量、霊魂と身体が表現するのはまさに実体としての神である。

スピノザにおいて、思惟と延長という二つの項は、少なくとも原則としては同じ序列に置かれる。これらは同じ一つの原物の二様の表現である。あるいはスピノザの言うように、神と呼ばれるべき同じ実体の二つの属性である<sup>21</sup>。

ライプニッツにおいて構成は少し込み入っているが、現象の相互調整に関する限り、スピノザと基本的方向性は異ならない。宇宙はモナドと呼ばれる不可分な、互いに作用することのない存在物の集合である。モナドはそれなりの仕方で全体を表象する。全体とはモナドの相互補完性そのものであり、要するにこれが神である。

全体つまり神とは、ライプニッツにとってこの奥行きそのものである。またモナドとは相互補完的な、この平面的な視角である。それゆえライプニッツは神を、「視点を持たない視角」あるいはさらに「宇宙の調和」と定義した。つまり神とはモナドの相互補完性なのである<sup>22</sup>。

だが関係のシステムの原理上非時間的な本性からして、これらの近代形而上学は結局のところ、経験される変化や時間をうまく包括できなかつた。これらの形而上学は従って経験される時間を、下等な存在の不完全性に帰することで除去する。

たしかに神のうちに実在するものの全てを集中させたあと、神から事物へ、永遠から時間へと移行することはこれらの哲学者にとって難しくなる<sup>23</sup>。

ライプニッツはこれについて独自の言葉で語る。つまりライプニッツは時間を空間と同様、混雑な知覚であることにした。彼にとって多数のモナドが総体(ensemble)について得られた視角の多様性だけを表現するとすれば、単独のモナドの歴史はこの哲学者にとって、ひとつのモナドが自身の実体について取りうる視角の複数性以外のものではほとんどありえないように見える<sup>24</sup>。

ところでスピノザの思うところはそれほどはっきりしないが、この哲学者は

永遠と持続するものの中に、アリストテレスが本質と偶有性の中に立てたのと同じ差異を求めているように思われる […] <sup>25</sup>。

したがってこの意味でこれらの近代形而上学は、ベルクソンにとって古代の形而上学と同じ陣営に属するのである。

以上の検討から、経験される時間についてのベルクソンの形而上学な立場は、存在するものの中の依存関係の文脈で、「なにものにも依存しない（独立な）存在」という意味での「実体」に対する態度によって提示されると思われる。ベルクソンは経験される時間に「実体」という概念を用いるのを避けているように見えるが、この概念は伝統的な形而上学の文脈では一般に、全ての事物がそれに依存し、それ自体は何ものにも依存しない、つまり絶対的に独立な存在を示すものである。Simons の考察によると、実体と呼ばれる絶対的に独立な存在に整合的な意味を与えるとすれば、それは互いに依存し合うものの集合・総体か、あるいはこの集合・総体の外にあり、この集合・総体の少なくともひとつのメンバーがそれに依存するところのものである<sup>26</sup>。

それが質料との接触によって生み出す存在との関係において、古代の形而上学における理念としての形相を、ベルクソンはこのような依存の関係において「実体」に相当するものとして捉えていると思われる。さらに言えば今示した総体の外にある実体の地位に、理念的な形相は置かれるように見える。この点については時間的な角度から全体を考察した方が端的に指摘できるように思われるため、ここでは示唆するに止める。時間的な全体についての考察は次節に委ねたい。

差し当たり指摘できるのは、集合・総体はそのメンバーを依存の関係で連結した全体を形作るということである。メンバーは最も形式的には、総体を網羅的に尽くす総体の部分である。この全体は、メンバーが外の何かと依存の関係で繋がることを許さないとき、閉じかつ連結された全体である。このような全体を族 (family) と名づけよう<sup>27</sup>。ところで関数は対象の間で依存関係からなる族を形作る。これを関数的な統合 (functional integrity) と呼ぼう<sup>28</sup>。このように関数的な統合として形成された全体は、関数という接続の無時間性ゆえに、因果関係から時間経過の意味合いを取り除き、無時間的な論理的関係として扱えることを示唆する<sup>29</sup>。

この意味で関数的統合という依存関係の全体は、ベルクソンが批判的に考察し

た近代形而上学における実体に近い意味を持つと思われる。ベルクソンはいわば、経験される時間を、関数的な統合に依存しないものとして提示するのである。ベルクソンは経験される時間がむしろ、関数的な統合の発端にあると指摘する。にもかかわらず、時間的な統合を核とするような形而上学のシステムは結局、経験される時間の間隔そのものを無視するのである。このような形而上学のシステムは間隔の末端を数えて得られる値の形でしか、時間を扱うことがないというのがベルクソンの論点である。

## 2. 多数を横断する時間的な全体

とはいえ、個々の経験される時間は何らかの仕方で、これらの時間を含む全体をなすとは言えないだろうか。そう言えるのであれば、この全体が統一あるいは統合の形を取り、個々の経験される時間がそこに依存する実体として現れることがあるようにも思われる。あるいは個々の経験される時間はただ集積されるだけで、統合をなすことはないのか。

ベルクソンの場合、経験される時間が統合された全体をなすにしても、これをアリストテレス的な理念的形相や、近代形而上学的な関数的総体に擬えることは敬遠されている。さらにベルクソンは経験される時間を、部分が全体を構成し、全体が部分を統合する、という依存関係のうちで把握することそのものを回避しようとしている。

「形而上学序説」においてベルクソンは、経験論と合理論、あるいは分析と総合の名のもとで、二つの互いに対立する還元主義的立場を批判している。この批判の狙いはまさに、経験される時間、より根本的には、いかなる記号も介することなく把握された動く時間的な現実である持続について、それが多であるとか一であるとか指摘することができるかどうかを糺すことにある。

この批判に先立ち、ベルクソンは経験論と合理論に共通の弱点を指摘する。すなわちこれらの立場は、「どちらも部分的な覚書を実際の部分とみなしている […]」<sup>30)</sup>。ここからベルクソンは、予備的考察として、心理的「状態」の概念を批判する。ベルクソンの指摘によれば、状態とは人格を構成する部分ではない。人格がおのずと細分化されて複数の状態が現れたりほしくない。むしろ状態とは、分析によって抽出された「要素」なのである。

異論の余地なく、心理学的な「状態」は、ある人物に属するというそれだけで、人格の総体を反映する<sup>31</sup>。

これらの心理学的状態は、単独ではひとつの素描、つまりそこから人為的に再構成を始める発端にすぎない。これはある要素的な側面から捉えた全体なのであり、この側面が特に関心を惹き、覚書の配慮の対象となった。これは部分ではなく要素である。これを得るのは細分ではなく分析である<sup>32</sup>。

このように心理的状态は部分的な覚書であり、対象の真正の部分ではなくその記号の部分である。この考察から確認できるのは、ベルクソンが最初から、個別の経験される時間の帰属する統一を認めているということである。ただしこの統一は個別の経験される時間の連結や接続によって生じるのではなく、最初から個別の経験される時間を分かち難く包括している。

この観点からベルクソンは、複数の状態を貫通する全体を冗長性ゆえに否定する経験論を批判する。

この立場は、原物を翻訳のうちに探す。翻訳のうちに当然ながら原物は存在しえない。するとこの立場は、原物が翻訳のうちにないと言って原物を否定する。必然的にこの立場は否定の累積に至る […] <sup>33</sup>。

合理論は「状態」から出発して統一を得る。だが「状態」は抽象的な覚書であり、統一は抽象的な形式であって、全ての状態を無矛盾に包括できたとしてもそこに何の具体的な現実性もない。

複数の心理的状态はこの分析のうちで最小限の実質的なところしか持ちも維持もしなかったので、「自己の統一」は質料を欠く形相でしかない。この統一は無規定で絶対的に空虚である<sup>34</sup>。

分析と総合についての同様な批判を経てベルクソンは、真正の部分ではない「要素」にもとづくという理由で、多数の時間という考え方も単一な時間という考え方も放棄する。

たとえば私はこう言おうか。一方に、継起する意識状態の多数性があり、他方にこれらをつなぐ統一性がある。持続はこの統一性とこの多数性の「総合」であることになるだろうが、それは神秘的な操作であって、繰り返すが、それがどうやって微妙な差や程度を受け入れるのかは分からない<sup>35</sup>。

Simons によると、例えば過程や出来事の多数性はある人物の歴史とみなされ、この人格のもとで統一されると思われがちである。人格は一つの不可分の統一であって、さらに時間的に細分を許す過程や出来事とは異なる。従って過程や出来事から人格を構成することはできない。人格が過程や出来事を貫く、という論点にこだわるなら、人格はここで過程や出来事と独立に前提されなければならない。ヒュームのような還元主義者は、このような人格の無条件の肯定にいかがわしさを感じて承伏しない<sup>36</sup>。

ベルクソンの「多数性と統一性の総合」への疑惑はこの立場に近い。だが他方でベルクソンにとってはさらに、今見たような可分の「状態」や「出来事」というのは、実用的ではあっても実在的ではない虚構である。時間的な全体が真に存在するとしても、すでに見たとおりこの虚構の連結や複合のうちにそれはない。だが真に存在する全体を多数の状態の外に求めだすと、実体としての絶対的に独立な存在が有効であるように見えてくる。ベルクソンが多数を貫く統一を「質料なき形相」と呼ぶのはすでに見た通りである。還元主義者や、ここでのベルクソンが警戒するのはこの独立な実体の介入である。しかし状態や出来事の背後に分析以前の現実を見る点でベルクソンは状態の多数性への還元主義者とも異なる。

では個別の経験される時間について、どのような総体が持続のもとで提示されるのか。ベルクソンはここに、『創造的進化』で彼が近代形而上学に対して行ったのと近い批判を導入する。ベルクソンは多数性への分析を、数学的な点で構成される宇宙のモデルまで進行させる。

もし持続が、紐のように複数の瞬間を繋ぐ統一性によって繋がる、その瞬間の多数性であるなら、これらの瞬間はどれほど短くても選ばれた持続である。これらの瞬間は無数に存在する。私はこれらの瞬間がどれほど互いに接近していても構わないことにする。いつでもこれらの数学的な点の間に、別の数

学的な点がいくつもある。という調子で無限に続く。多数性の側から臨むと、持続は瞬間の粉塵のうちに消える。これらの瞬間のどれもが持続することはなく、一瞬のうちに<sup>37</sup>。

この観点に立つと、いわば時間間隔のこうした末端を統合する統一性は、近代科学の関数的な統合、関係のシステムを経て、近代形而上学が認める关系的・関数的な統合としての実体に近接するだろう。

この統一性は、その本質を私が掘り下げるにつれて、それゆえ運動のためのひとつの不動の基体 (subsrat)、時間にとっての得体の知れない非時間的な本質であるように私には見えてくるだろう。これを私は永遠と呼ぶだろう。死んだ永遠である。というのもこの統一性は、それに生命を与える運動性を欠いた運動以外のものではないからだ<sup>38</sup>。

ベルクソンはこうして、「要素」的な状態や出来事に立ち会う全体や統一性の向かう方向が、関数的統合としての全体を構築する方向であると指摘する。

ベルクソンが個々の経験される時間を含む持続についての展望を示すのは、このような立場との対比によってである。予備的考察がすでに示すように、ベルクソンは記号的な表現の背後に直接経験される時間を求める。ベルクソンによれば、経験される時間は多数であるとともに一でもあるが、それは持続の重層的な構造によってである。多数の要素から出発することも抽象的統一を無前提に認める必要もない。むしろ各人が経験する時間的な現実、つまり砂糖が溶けるまでの待機が示すように、溶ける砂糖の持続と私の持続という、それぞれ頑ななリズムの構造を持った複数の持続の経験を、極限まで拡張することから始めねばならない。

[...] 私たちの持続は [...], 私たちを持続の連続性の全てと接触させる。この連続性を私たちは下方なり上方なりへ追跡する。どちらの場合にも私たちは、次第に激しく努力することによって私たちを際限なく拡張し、どちらの場合にも私たちは私たち自身を切断する。最初の場合、私たちは次第に散漫になる持続で歩む。この持続の鼓動は私たちのそれよりも格段に速く、私たちの単純な感覚を分割し、質を量へと薄める。極限には最も純然たる等質性、

最も純然たる反復がある。私たちが物質を定義することになるのはこの極限によってだ。もう一つの方向では、私たちは次第に緊張し、次第に圧縮し、次第に強化される持続で進む。極限には永遠がある。概念的な永遠ではない。それは死んだ永遠である。むしろ生の永遠なのである<sup>39</sup>。

これが形式的・関数的な近代形而上学における全体に対する、ベルクソン自身の時間的統一と多数の展望である。この形而上学的な展望においては、経験される時間はそれ自体として分割されることなく、非数学的なリズム構造を弛緩させることで物質的な多数性の時間的かつ経験的な基礎が見出され、外から統一性を持ち込むことなく、緊張することで宇宙的な統一の経験的な基礎が見出される。

### 3. 物質の持続の拡張の可能性

依存の関係はベルクソンにおいて分析されることはない。むしろ、これに相当する多数と一のための構成は、持続の直接的な把握とその緊張度の調整の努力によって追求されている。

持続内部には、それぞれの緊張度に特徴的な一定のリズム構造がある。ただその要素を妥当な、実在性を失わない形で取り出すことはできない。経験される時間の勝手な延長や短縮に抗う頑なさ、このリズム構造の恒常性によって説明できるだろう。この展望は哲学としては一貫した、内的には整合的な立場であると思われる。

本稿を終えるにあたり私たちは、ベルクソンのこの形而上学的立場にとっての、冒頭に指摘した困難に立ち戻ろう。つまりベルクソンのこの考え方の枠組みのうちで、特殊相対性理論が指摘する、相互に加速度運動する二つの系の間の時間のずれを扱うことの困難に、である。

Simonsによると、時空の空間的な距離によって隔てられている場合、複数の点的な出来事も、複数の分割できない時間的な対象（物体や個体、波動）も、相互に作用することはできない。これらの出来事や対象が統合的な全体を形成する可能性については見解の対立がある<sup>40</sup>。

このような統合的な全体は、特殊相対性理論の数学的構造によって包括されるかもしれない。この構造そのものを、関数的な統合の一種と見なすこともありう

るだろう。この場合、立場上は関数的統合にもとづく一種の形而上学となる。

ベルクソンが『持続と同時性』で避けようとするのはこのような統合の理解である。ベルクソンはそれゆえ、二つの加速系における時間のずれの実在性を認めることを拒んだ。二つの系が空間的距離によって隔たるとき、経験可能なこれらの系の時間に対する相互の影響は定義上ありえない。また理論の構造は計算結果の数値として、ずれをもたらす。ベルクソンにとって、この結果は形式的・数値的なものに過ぎない。系の内部の時間は経験される時間をもとに計測された値としての時間であり、外からその運動が観測される系の時間は観測者の位置する系内部の時間からローレンツ変換を用いて算出される時間である。運動が相対的である限り、系の内部で経験される時間と外から算定される時間の関係は完全に相互的である。加速度運動が部分的等速度運動の連鎖で近似できるとすれば、時間のずれは運動と静止の相対性の相互性に由来する見かけにすぎない。二つの加速系の時間のずれが実在的であると考えことはそれゆえ、数学的構造がそれ自体で実在を記述できるとみなすことに等しいとベルクソンは主張した<sup>41</sup>。この点でベルクソンは、自らが形而上学に課した任務に忠実である。ベルクソンは経験される時間、消去し難い時間間隔を、それが数学的な点、数値となって構造のうちに取り込まれる手前で把握しようと試みたのである。

20世紀前半まではベルクソンの立場にも説得力はありえた。だが1970年代になると、時間のずれは実験的に検証されるとすれば、特殊相対性理論の数学的な構造は、何らかの時間的な実在性に対応するものでなければならない。残念ながらベルクソンの考え方の枠組みでこの対応をとらえるのは難しい<sup>42</sup>。

「形而上学序説」に述べられたベルクソンの形而上学の任務は、弛緩した持続と緊張した持続の間を動くことである<sup>43</sup>。形而上学は物質方向では、「最も純然たる等質性、最も純然たる反復」という極限まで持続を弛緩させる。だが文字どおりにとるかぎり、この形而上学の枠組みによって、相互に全く影響しない事象の関係を把握できるとは考えにくい。しかしともかく、相対性理論の意味で空間的に隔った事象間の関係は、ベルクソンが持続の弛緩によって特徴づけた物質の世界における関係である。このような関係を把握するところまで、持続の弛緩の極限についての考え方に変更を加えることは可能だろうか。

経験される時間からのみ出発するのでは、このギャップを埋めることは困難であるように思われる。むしろ時空の空間的距離に隔てられた事象や対象について、

散漫な物質的持続として把握するための示唆を得るには、厳密に形式的・関数的にはではない仕方で最小限の依存ないし統合の関係を示す全体の概念と、経験される時間や持続の弛緩の概念との接合を試みることに有望であるように思われる。それがどのような接合となるかについては稿を改めて考察する必要がある。いずれにしてもこれはベルクソンが展開した限りのベルクソンの形而上学ではもはやなく、その可能な拡張となるであろう。

---

<sup>1</sup> Henri Bergson, *L'évolution créatrice* (1907), Paris, Puf, 2013, pp. 9-10.

<sup>2</sup> *Ibidem*, p. 338.

<sup>3</sup> *Ibidem*, p. 318.

<sup>4</sup> *Ibidem*, p. 319.

<sup>5</sup> *Idem*.

<sup>6</sup> *Ibidem*, p. 324.

<sup>7</sup> *Ibidem*, p. 343.

<sup>8</sup> *Idem*.

<sup>9</sup> Henri Bergson, *Histoire de l'idée de temps : Cours au Collège de France 1902-1903*, Paris, Puf, 2016, p. 280.

<sup>10</sup> *Ibidem*, p. 282.

<sup>11</sup> Henri Bergson, *La pensée et le mouvant* (1934), Paris, Flammarion, 2014, p. 214.

<sup>12</sup> *Idem*.

<sup>13</sup> *Ibidem*, p. 215.

<sup>14</sup> Henri Bergson, *L'évolution créatrice* (1907), Paris, Puf, 2013, p. 343.

<sup>15</sup> *Ibidem*, p. 344.

<sup>16</sup> *Ibidem*, p. 347.

<sup>17</sup> *Ibidem*, pp. 347-348.

<sup>18</sup> *Ibidem*, p. 348.

<sup>19</sup> *Ibidem*, p. 349.

<sup>20</sup> *Ibidem*, pp. 349-350.

<sup>21</sup> *Ibidem*, p. 350.

<sup>22</sup> *Ibidem*, p. 351.

<sup>23</sup> *Idem*.

<sup>24</sup> *Ibidem*, p. 352.

<sup>25</sup> *Idem*.

<sup>26</sup> Peter Simons, *Parts: A Study in Ontology*, Oxford, Oxford University Press, 1987, pp. 318-322.

<sup>27</sup> *Ibidem*, pp. 327-330.

<sup>28</sup> *Ibidem*, pp. 342-344.

<sup>29</sup> *Ibidem*, p. 345.

<sup>30</sup> Henri Bergson, *La pensée et le mouvant* (1934), Paris, Flammarion, 2014, p. 193.

<sup>31</sup> *Ibidem*, p. 190.

<sup>32</sup> *Ibidem*, p. 191.

<sup>33</sup> *Ibidem*, p. 194.

<sup>34</sup> *Ibidem*, p. 195.

<sup>35</sup> *Ibidem*, p. 207.

<sup>36</sup> Peter Simons, *Op. cit.*, pp. 350-352.

<sup>37</sup> Henri Bergson, *La pensée et le mouvant* (1934), Paris, Flammarion, 2014, p. 208.

<sup>38</sup> *Ibidem*, p. 208.

<sup>39</sup> *Ibidem*, p. 210.

<sup>40</sup> Peter Simons, *Op. cit.*, pp. 325-326.

---

<sup>41</sup> Henri Bergson, *Durée et simultanéité* (1924), Paris, Puf, 2009, pp. 183-213.

<sup>42</sup> Elie During, « Bergson, Einstein, et le temps des jumeaux : une singulière obstination », in *Einstein au Collège de France*, Paris, Collège de France, 2020, p. 37. 「ベルクソンがそれを知ることができたなら彼に対して確実にアインシュタインの相対性理論についての彼の展望を見直すよう迫ったはずの事実を Hafele と Keating が証拠立てるまでには、1971年を待たねばならない。原子時計の遅れが地球を周回する運動によって発生した。この現象は欧州原子核研究機構の粒子加速器内で Ross と Bailey によって 1977年に確認される」。

<sup>43</sup> Henri Bergson, *La pensée et le mouvant* (1934), Paris, Flammarion, 2014, pp. 210-211.

(ながの・たくや 熊本高等専門学校熊本キャンパス)